



Title	メーテルリンクと日本近代詩人の比較文学的研究：北原白秋と同時代を中心として
Author(s)	出口, 馨
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49391">https://hdl.handle.net/11094/49391</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 【28】

氏名	出 口 錦
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 22609 号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	メーテルリンクと日本近代詩人の比較文学的研究—北原白秋と同時代を中心として—
論文審査委員	(主査) 教授 出原 隆俊 (副査) 教授 北村 隼 准教授 加藤 洋介

## 論文内容の要旨

本論文は明治から大正を中心として、メーテルリンクと日本近代詩人について比較文学的考察を行うものである。

第一章では、明治大正期の、日本文壇におけるメーテルリンク紹介の経緯と受容の様相を調査整理するとともに概観を述べた。当初は英訳による受容が中心で、戯曲や隨筆に比べると詩作品の紹介は迅速には進まなかつたが、近代詩の搖籃期において、西洋象徴詩に強い関心を抱いていた詩人たちによって積極的に受容された。

第二章では、メーテルリンク最初の詩集であり、象徴派劇詩人としての出発点となつた

『温室』について、「温室」あるいは「室(むろ)」というモチーフを中心に考察を行つた。メーテルリンクはそこに自らの悩める魂とアナロジーの糸で結ばれる空間を創造した。北原白秋の「室」には憂愁の空間としての部分にメーテルリンクの温室との類似点がある。

第三章では、『邪宗門』後の白秋を「パンの会」および詩誌『屋上庭園』における活動の中に追つた。「パンの会」の盛況の影で次第に孤独を感じるようになつていった白秋は、悩める魂の問題を主題とした『温室』に顕著に見られる<青>の色調の中に、「異邦人の悲愁」を感じ、強い共感を抱くようになったと考えられる。

第四章、五章においては、そのような「パンの会」の時代を背景として書かれた白秋詩に見られる、メーテルリンクのテクストの具体的な影響とその創作上でのイマジネーションの発展をそれぞれの作品を通して検証した。

第六章では、時代を大正期に移し、白秋とは対立関係にあった三木露風と文学活動をともにした西條八十におけるメーテルリンクの受容を中心に考察した。メーテルリンクの翻訳も行つてゐる八十はその作品世界についての優れた理解者であったと考えられ、現実世界に隣接する幻想空間に関心を抱いた八十は夢と現実の境界を詩の中に表現しようし、またそこから進んだ不可見の世界や死に対して畏怖を示した作品も遺している。

第七章では、不可見の世界に関わる問題であり、象徴主義や神秘主義的モチーフの一つである<盲目><眼をふさぐ>という表象の変遷を、大手拓次を中心として近代詩の中に辿つた。メーテルリンクは特に初期の作品において<盲目>に重要な意味を与えているが、日本の明治四十年代から大正期にかけての近代詩には、このモチーフが頻見される。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は国内外の文献を幅広く涉獵し、伝記や本人あるいは周辺人物の発言を丹念に示すことで、近代日本におけるメーテルリンク受容の全体像を正確に捉えるとともに、北原白秋を中心に木下李太郎、西條八十、萩原朔太郎、大手拓次らにおける個別的な受容についても、単に表層の類似に留まらず文学創造の根幹において明らかにしようと試みた力作といえる。

北原白秋や西條八十の詩の分析に際しても、後の詩集収録時のみならず、発表時の初出段階からの改稿にまで目配りをして、その改稿意図を探るという論の展開の仕方も非常に緻密であり、論文としての十分な実証性を保持しており高く評価することができる。

何よりも、幅広い対象に対して、一般論的な叙述にとどまるのではなく、テクストを深く読み込む姿勢を堅持していることは、当然のことではあるともいえるが、大作でもあることから高く評価されてよい。

扱われている一つ一つのモチーフは、展開すればそれぞれに独立した論を成立させる可能性も窺える。

一方で、北原白秋の詩における「青」のイメージにメーテルリンクからの影響を指摘し、白秋における「(青)の詩学」を指すものの、それが白秋の詩全般に適合しうるものであるかについては、なお考察の余地があろう。研究史の厚い蓄積をもつ萩原朔太郎への影響についても、さらに踏み込んだ考察が必要であると思われる。また、このテーマにこだわるあまりに、全体の枠組みを逸脱している側面も否定できない。

また、詩の解釈については、多様な解釈の可能性を踏まえたうえで、自らの判断を決するという姿勢が求められよう。記述の面でも、時折、誤読を誘引しかねない表現が見られることも気になるところである。さらに、引用されたフランス語の資料に単純な誤りが散見される。

いくつかのことについて、よりいっそう充実すべき課題もあるが、きわめて意欲的なものであり、本論文は博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。